論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　愛葉　由依

論　文　題　目

被爆者のトラウマにおける時空性と社会性：医療人類学的研究

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	佐々木　重洋
委員	名古屋大学教授	近本　謙介
委員	名古屋大学准教授	東　賢太朗
委員	名古屋大学准教授	吉田　早悠里

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の概要】

本論文は、被爆後に転居経験を持つ被爆者たちのトラウマの動態を、それぞれの居住環境、ライフステージ、社会的背景との関連において分析し、トラウマ反応とトラウマ記憶の形成および再生産の社会的・文化的過程を明らかにするとともに、彼らがどのようにトラウマと折り合いをつけてきたのか、その対応過程を分析したものである。本論文は、7つの章からなっている。

序章では、被爆者の心の傷を扱った先行研究が検討され、トラウマとPTSDをめぐる議論と医療人類学研究の展開をふまえつつ、広島・長崎県外在住の被爆者と乳幼児期被爆者も対象に含めた事例研究の蓄積と、これまで主として精神医学と心理学が主導してきたPTSD患者の臨床治療理論の再検討の必要性が示される。

続く第1章では、広島・長崎における原爆の被害状況を概観したうえで、原爆の被害に遭った人々の一部が広島・長崎県外の国内外に転居した経緯について、統計資料やアンケート調査の結果をふまえて詳述される。

第2章では、被爆時に0歳～20代だった人々が就学や就職、結婚、産育に重点を置いた1945年～1970年頃を、第3章では、それらの人々の仕事や産育が落ち着き、生活にゆとりが生じる1970年頃から2000年頃を、そして第4章では、それらの人々の多くが仕事や産育の第一線から離れ、時間的にも精神的にも余裕が生まれる2000年前後以降を、それぞれ被爆者のライフステージに対応した時代区分として設定し、各時代におけるそれぞれの事例における社会背景と生活環境に留意しつつ、聞き取り調査および、被爆者たちが記した手記や自分史、彼らの証言映像、被爆者を扱った新聞記事などの資料の検討をつうじて、いつ、どのようなトラウマ反応が生じ、またどのようなことがトラウマ記憶となり、彼らはどのようにそれらのトラウマと折り合いをつけながら生活してきたのか、各章ごとに詳述される。

第5章では、序章で示された論点に即して分析がおこなわれ、被爆者のトラウマ反応の表出過程が類型Ⅰ～Ⅲに分類できること、これらのうち類型ⅠとⅡについては従来のPTSD理論でおおむね説明できるものの、類型Ⅲではトラウマ的出来事と外傷性記憶、トラウマ反応の関係性がきわめて複雑で、トラウマ反応における時間の逆向も認められることが示される。そして、被爆者によるトラウマとの折り合いのつけ方には、ジュディス・ハーマン［1992］が提唱したトラウマ治療の過程に関する理論モデルとの類似が一部で認められたものの、個別性、時空性、社会性の要素が大きく、治療過程の序列的段階化が困難であることが示される。

終章では議論の総括と結論が提示される。そして、PTSDとトラウマを個人の病理の問題に還元すべきでないこと、その表出過程において前提視されてきた因果律と不可逆的な時間の流れを再考し、個々の生活実態に即した研究が必要であり、それは当事者が心の傷と前向きに向き合ううえでも一定の意義を持ち得ることが主張される。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の評価】

原子爆弾による被爆者の心の傷を主題化した研究は、ロバート・リフトンによる心理学的調査研究［Lifton 1968］をその嚆矢とする。それ以降、被爆者研究はさまざまな学問分野ですすめられたが、それらの多くは広島・長崎在住の被爆者を対象としていた。他方、トラウマが第二次世界大戦中に「戦争神経症」として注目されたことや、PTSD が 1970 年代後半から 1980 年代にかけてベトナム帰還兵、レイプや DV の被害者たちの外傷後ストレス症候群への対応と治療、補償請求活動支援の必要性から概念化されたことからもうかがえるように、従来のトラウマと PTSD 研究は、心理学と精神医学によって主導されてきた側面が強い。

本論文は、被爆後に広島・長崎県外に転居した被爆者を対象とし、彼らのトラウマの動態をそれぞれの居住環境、ライフステージ、社会的背景の変遷との関連において記述するとともに、トラウマ反応とトラウマ記憶の再生産の過程とそれぞれのトラウマへの向き合い方を、人類学の質的調査研究の手法を用いて明らかにした初めての成果であり、その独創性と新奇性がまず高く評価できる。

本論文は、「愛知県原水爆被災者の会」の活動への 7 年間におよぶ参与観察、10 名の会員に対する継続的な聞き取り調査にくわえて、被爆者の証言映像や手記も援用し、個人ごとに異なるトラウマ反応とトラウマ体験をそれぞれの生活史の中で描き出すことに成功している。これには、筆者の祖父も被爆者であり、2019 年の祖父の逝去まで一緒に生活していた経験と、「被災者の会」主催の原爆関連の催しに一緒に参加し、2015 年から 2019 年の間に広島へ 6 回、長崎へ 1 回一緒に訪問しつつ体験談と回想を聞き取ったことも大きく寄与しており、被爆者の日常生活におけるトラウマ反応とトラウマ体験の実態描写に独自の説得力を持たせている。

さらに、被爆者のトラウマ反応の表出過程の分析で提示された類型論は、新しい理論モデルとして注目される。そして、従来の PTSD 概念では把握できない事例の提示とともに、被爆者のトラウマ反応の表出が、従来前提視されてきた因果律や不可逆的な時間の流れと必ずしも関係しないということを指摘した点は本論文の重要な成果である。また、被爆者らの多様な生活史におけるトラウマへの対応過程には、ジュディス・ハーマン［1992］によるトラウマ治療の過程をめぐる精神医学理論モデルと結果的に類似する部分も認められる一方、これらには時空性と社会性が大きく関与しており、治療過程の普遍的な段階化が困難であることを指摘した点も、生物医学と精神療法に根ざしたトラウマ論に再考を促す貢献として高く評価できる。

もっとも本論文は、医療人類学としての議論の面ではなお深化の余地を残している。ただし、これは現時点での本論文の達成と価値をいささかも揺るがすものではない。

以上により、審査委員一同は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。